日向國海岸砂丘地域の研究（一）

小牧實繁

大正十年三月天然記念物に指定せられた日向青島は、基盤第三紀砂岩頁岩の互層よりなり、最高標高六米の地點に於いて厚さ約一・五米の貝層を載せ、その上に若干の腐植土を有すること既に多くの人達の知る如くである。これと本土との間には海砂が沈積し、島は今や殆んど陸繫島となつてゐるが、大潮時には海砂が洗はれ、その間海水を通じ島は完全な島となるのである。[1]

青島より南方折生迫の北方海岸にも小砂丘があるが、砂は細かく黑色を帶び貝破片を混じてゐる。砂丘にはケカモノハシ、ハマヒルガホ、ハマエンドウ、オニシバ、ハマゴウ、チガヤ等の砂丘植物が認められ、また三〇—五〇年生の松が植栽せられてゐる。此れ等植物の外に更にハマオモト等の暖帶植物が見られるが、それ等は最近青島から移植せられたものである。[2]

青島の西方對岸にも小規模の砂丘があり、その松林には百年位の松も有り松林の中には普通植物も叢生してゐる。これは宇名切國有保安林であつて宮崎營林署の管轄に屬してゐる。その北方に宇海添國有保安林となつてゐる松林を有する砂丘が存するが、それは前者の連續であつて前者と同樣平坦なものである。面積前者は三町四反二十歩、後者は三町七反七畝十一歩、共に縣設青島公園敷

地となつてゐる。

萩原川は明治三十五年測圖五萬分一地形圖「折生迫」によれば街道の地點からぐつと左岸に曲流して海に注いでゐるが今は街道上の橋の北一〇度東に於いて直ちに海に注いでゐる。これは昨昭和九年秋冬の交に決したものであるといひ、舊水路はその北方に殘存し、その左岸には侵蝕による砂丘嶮岸の地形を殘してゐる。この河口右岸の海岸砂丘には、ハマボウフウ、コウボウムギ、テリハノイバラ、ビロウドテンツキ、スズメノエンドウなどの外に特殊なものとしてイヌトクサが認められる。

萩原川の北方にも小規模の砂丘があるが、字松添保安林をなす松林によつてよく固定せられ、そこには普通植物も叢生し、松の落葉及び腐植土も豐富である。砂丘の風下には畑が開け、麥、桑、蠶豆(ソラマメ)などが作られてゐる。

萩原、曾山寺間の突角附近に於いては砂丘は殆んど尖滅し基盤臺地の上に若干海砂が吹上げられた程度のものとなる。尤も基盤は堅い岩石ではなく粘土質の砂土である。併しその下部には砂岩・頁岩の互層があり、それが曾山寺の細流の底部に認められる。

明治三十五年測圖五萬分一地形圖によれば、嶋山聚落の西南に一つの池が存在するが、それは今は完全に消滅してゐる。里人の談によれば今より約二〇年も以前に田となつたと言ふ。宮崎縣耕地課串間俊一氏、前耕地課長林進士氏等の御示教によれば明治の末年組合事業として開墾せられたものである、開墾前はその水は樋(ヒ)を通じて南方加江田川舊河道に出たものであると言ふ。(3) 今は紫雲英

の一面に花咲く田圃となつてゐる。

尙、里人の談によれば今より五十年も以前には嶋山より曾山寺に至る間の交通は舟渡しによつた、明治十年西南役の時は確かに舟渡しであつた、現在の縣道は今より約四十年も以前、田圃の畦道であつた所に開かれたものであると言ふ。(4)

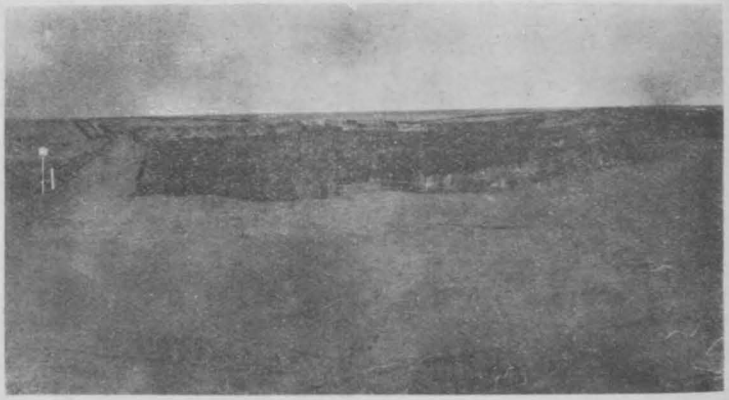
嶋山聚落の立地は僅かながら土地が高くなつてゐる。併しそれは純粹の砂丘と言ふべき程のものではない。寧ろ自然隄防とでも稱すべきものである。

木崎聚落の立地も土地はまた少しく高くなつてゐるが、これも臺地の續きであるとすべきであらう。

清武川は(5)木崎北方に於ける縣道橋梁より下流に於いても瀨をなしてゐるから若干地盤の隆起が考へられると思ふ。

橋の東方に於ける清武川の曲流の左岸に於いては砂丘の風下側が河水の侵蝕のため嶮岸をなしてゐる。そのため松樹の潛掘を受け半ば倒れたものなども見られるのであるが、此の附近には數重の砂除垣が作られその中に松の幼樹が植栽せられ宮崎縣潮害防備保安林となつてゐる。砂除垣は竹を立て横に竹を渡しその中に麥藁を挾んだ式のものである。而してこれより南方清武川河口に至るまでの海岸第一列砂丘丘頂より內側に同樣の潮害防備保安林が續いてゐる。第一圖はこれを示す。清武川東方砂嘴の南端に於いても砂丘は松林を以てよく固定せられ、その背後の明治三十五年測圖五萬分一地形圖に荒地として示されてゐる川沿ひの部分も今は開墾せられて畑となり、麥、菜種など

第一圖



の作られるところとなつてゐる。里人の談に今より十年乃至十五年前木花村嶋山部落の人達が開き、追々に廣くなつたものであると言ふ。但し湧水のため稻が腐るので田にはならないとも言ふ。嶋山の農夫は船で渡り馬はかち渉り耕作に從ふ。松林の部は保安林となつてゐて開墾は許されない。嶋山東方清武川左岸の部に於いては河水の侵蝕により砂丘の風下側に高さ二—三米の嶮岸が生じてゐるが、今耕地となつてゐるのはその南方の地である。

前述清武川曲流の東方に於ける海濱の傾斜は二—四度であり、それより内陸に平坦となり、その内側に第一列砂丘があり、その背後はまた平坦となり、その内側に第二列砂丘があつてその背後はまた平坦となり、その内側に第二列砂丘があつて松林を有する。而して此の海岸砂丘に於いて注意せられる特異な現象は、第一列砂丘に於いてその風下側（向陸側を假りにかく稱す）が西寄の風によつて風蝕を受けその向風側（向海側を假りにかく稱す）に於ける砂堆が却つて風下側の傾斜を示してゐることである。松林を有しない部分にも砂丘植物例へば、ハマボウフウ、ハマゴウ、ケカモノハシ、ハマエンドウ、コウボウムギ、ビロウドテンツ

キ、オニシバ、ハマグルマ等があり、第一列砂丘にはコウボウムギが卓越するのであるが、砂丘は完全に固定せられてゐるとは言ふことを得ない。然るに松林の存する部分には苔の生じてゐるのが見られるくらゐで、この部分はよく固定し(此の中にもチガヤなどの砂丘植物が存する)、その風下側は緩かに傾斜して畑に開かれ、麥が作られまた豌豆なども作られ麥の間に煙草(主として米葉)が作られるところとなり、此の風下側が更に緩かに背後の水田面に下るのである。大體蠣原の東方道路が畑と水田との境界となつてゐる。

明治三十五年測圖五萬分一地形圖に於いては標高一七米を最高所とする松崎砂丘の南方に廣い水面が見られるが、これは今は全然消滅して水田となつてをり、而してその東方、郡司分[6]聚落の正東方に當つて呼餅神(オケガミ)なる新部落が生じてゐる。呼餅神には今家が十二軒あり、そのうちの一軒は都城から來たと言ふ。宮崎縣耕地課串間俊一氏、宮崎縣高等農林學校林進士氏の談及び串間氏より示された「宮崎縣宮崎郡赤江町蠣原耕地整理組合設計書」(縣耕地課保管)によれば、この沼地は元來三年乃至五年に一度の收穫を有する不定田(面積一〇五町八段二畝一歩)で鴨獵地であつたのを、縣設計工事監督の下に組合事業として八八町一反三畝八歩の田に開田したものである、大體は洪水毎に自然に埋つてゐたのをポンプを以て人工排水したのであると言ふ。里人の談に干拓の完全に成つたのは三年ばかり前(昭和十年より)のことであると言ふ。

この開田が一時になつたものでないことは、現存呼餅神の村端に建てられてゐる「蠣原水門修繕紀念之碑」なるもの並びに呼餅神の氏神に存する「開墾記念碑」の文面によつても明かである。こ

れを左に示す。

蠣原水門修繕紀念之碑

開田七十町歩餘ノ由來ハ貞享元年藩主伊東公時ノ地頭川崎權之助並代官阿萬義太夫日高津之助諸氏ニ命ジ諸役事ヲ以テ防潮築堤工事ヲ施サシメシニ依ル爾來二百二十六年ヲ經シ今日水門破損潮水ノ被害甚シ茲ニ關係部落協議成總費壹千圓ヲ投シ以テ修繕工事ヲ加フ實ニ明治四十三年一月成工也

關係部落大字郡司分字郡司分大字田吉字松崎大字本郷南方　　近藤忠臣謹書

開墾記念碑

昭和九年四月建設　總面積九町二段四畝歩　昭和七年九月二十七日起工　八年十月三十一日成工

呼餅神部落の名は前の「蠣原水門修繕紀念之碑」に附記せられた傳説、水門の工事再三破壞して成らざりし時呼餅神の大宮司に祈禱せしめたるにより成るといふ呼餅神の名に因むと思はれるが、部落構成の人間は前記の都城その他よりの移民であると思はれる。部落は新村乃至は移民新開特有の一種の氣分乃至景觀を呈するが、何れにしても水門の修築、水面乃至は沼地の開拓と共に成つた聚落であることに間違ひはない。水田耕作には馬を使用してゐる。(7)

この地點の砂丘風下側斜面は、傾斜五度であつて、畑に開墾せられた部分が多く、畑には麥が植ゑられ而してその間に煙草及び南瓜が作られてゐる。

松崎聚落の南方に、目下砂丘風下側の松林を開墾し畑を作りつゝある處が見られる。隣地は麥畑となつてゐるがこれらの畑地が開墾せられる過程を現實に示してゐて興味を引く。松崎聚落の東方

一七米三角點（三等）東南の地も低い所は水田であるが水の手の不便な部分は畑となつてゐる。

松崎聚落の東方より東北に亘る砂丘は最高一七米に達するが一面松林を戴き、[8] 松林には苔なども生じ、また他の普通植物も生じてよく固定せられ、松葉の掻き集められたものが松の木の下に蓄へられてゐるくらゐで、絶對安固の觀を呈し、その一七米三角點（蘿畑の中に立つ）附近にすら麥畑が開け、また瓜の早作り溫床が見られるのである。溫床は油紙障子を南に傾斜せしめ北側に垣を施して北風を防いだ式のものである。その北方の砂丘の連續中にあつても砂丘の頂上邊が麥畑となり其處に煙草が間作せられてゐるのであつて此の地海岸砂丘の安定性を物語つてゐる。

それより北方にも更に松林のある砂丘が連續するが、大體向風側、風下側共に八度を越えない（頂上附近の傾斜比較的大なる部分に於いても）緩傾斜を以て起伏するのである。

松崎の聚落及びその北に續く濱山（松崎のうちで家は七軒ある）の聚落に於いてはその西方に松林を作つたり、金竹の生垣を植ゑたり、更にそれに麥藁垣を施したりして西風及び西北風（一體に西風よりも西北風の方が多くまた强いと里人は言ふ）を防ぎ、そして其處に煙草の苗床や南瓜の溫床やを作つてゐる。煙草の乾燥小屋も見られるが、此の邊の煙草は凡て米葉であると言ふ。墓地が聚落の北はづれの砂丘上にあることはまた自然であらう。

松崎、津屋原間道路に直交する一道路の南方に磯村合名會社赤江農場がある。立派な建物を有する農場で、麥、煙草、豌豆などを作り、また若干ルーピン（桑、西瓜その他の肥料とする）などを作つてをり、附近に乾燥小屋なども見られる。農場では砂地を利用して養鷄もやると言ふ。

第二圖

これより津屋原に至る道路の東方砂丘の一部を西方の水田面まで掘り下げ（隣接畑の面より二―三米低く）水田に開いた部分がある。

津屋原聚落の立地は砂丘の第二列目に當り、海濱に第一列砂丘があり、兩者の間は稍低く、畑となり、麥や菜種が作られるところとなつてゐる。

松崎より津屋原に至る道路より東方は連續せる一帶の砂丘であるが、該道路より西方は漸く低く、水田となつてゐる。[9] 然るにそれより西方、立和・田元・高畑・田吉の線に至ると土地は若干高くなるやうである。これは低いけれども舊い砂丘の一列に當るのではないかと思はれる。

城ヶ崎の下流、大淀川の中洲は丸島と稱せられるが、洲上草木叢生し、若干の耕地があり、そこに桑、麥、菜種などが作られてゐる。洲上には家が一軒あり舟を有するが、これは農家ではなく夏場の料亭である。

北方より南方に突出し大淀川河口を塞がんとする長大な砂嘴には砂丘植物及び少數の松は生ずるが未だ松林の如きものは見られない。第二圖は大淀川北岸より南二〇度東を向ひ赤

第三圖

江港と大淀川河口砂嘴を望んだところを示す。[10]

蟹町（ガニマチ）（氏神、松熊神社）[11]東方の舊水路は殆んど葦生地と化してゐるが併し水面も若干殘存し未だ耕地化は行はれてゐない。

大淀川北方の入江には鰻を產するが、蟹町ではックラゴなる小魚を餌としてこれを釣り一ッ葉の料亭に送つてゐる。[12]第三圖は前記舊水路の入江に注ぐ地點より正東に向ひ入江とこれを圍む大淀川河口の砂嘴とを望むところを示す。

蟹町（ガニ）の北方入江の西方なる松林は潮害防備保安林（宮崎縣）となつて居り、中に水神の小祠が祀られてゐる。併し此の部分は標高二米餘に過ぎず、砂丘と稱することは出來ないものである。

蟹町北方の川の流路も入江に入る附近に於いては多く葦生地となり細流の觀を呈してゐる。

一ッ葉神社（稻荷社）[13]の鎭座する海岸の松林は面積二七陌四三、宮崎營林署の管轄に屬するが、中には五十年生くらゐの松もある。今は宮崎市人の遊覽地となり多くの料亭が軒を

並べてゐる。料亭の廣告にボラ名物料理とあるこの魚は言ふまでもなく大淀川の入江に產するのである。

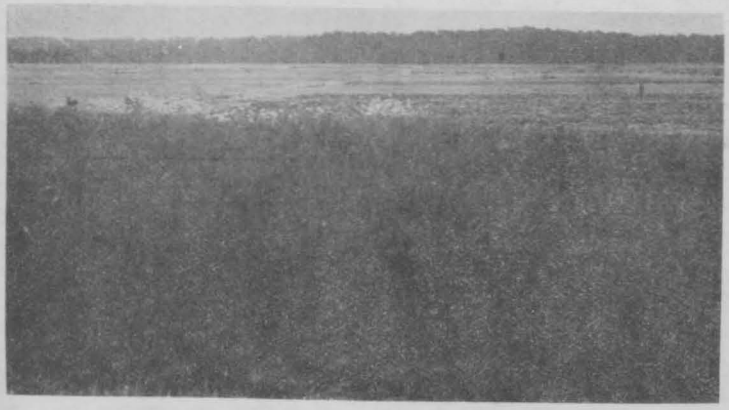
大淀川北岸より一ッ葉神社に至る入江西方の松林は眞に低平な松林であつて砂丘とは稱し難いものであるが、その風下側の麥畑に開墾せられたところに於いて檢すれば、砂丘砂と區別し難い砂よりなつてゐる。開墾せられた麥畑の表面に於いて見るに、此の砂丘砂の風下側は二—三度の傾斜を示しつゝ背後の水田面（紫雲英、菜種を作る）に下る。畑にはまた薤（ラッキョ）、瓜なども作られてゐる。砂丘は前述の如く低平で松林を有するのみならず、そこには茱萸（これも植栽せられたものであるか）その他の普通植物が叢生してゐる。

宮崎縣立圖書館長若山藏六氏の談によれば、一ッ葉の海岸に於いては約三〇年の間に海岸汀線が遠くなつたと感ぜられる、これを漁夫等に質すに彼等はそれを當然の事となすやうであるとのことである。併しこれは事實としても直接地盤の隆起を物語るものとは言へないかも知れない。大淀川流出の土砂が堆積するものとして一應說明がつくから。

一ッ葉の海岸松林をなす低平な砂丘は、前述の如く緩かな傾斜を以て背後の水田面に下るのであるが、この水田面は稍泥炭質を帶び、その間を山崎から南下する水路が貫いてゐる。然るに海岸砂丘とこの水田面をなす凹地を隔てた西方、江田・山崎を連ねる一線は土地が再び高く、山崎聚落の南方に於いては標高一〇・五米を算する。該丘陵は、地形圖上にも賣み取り得る如く、舊砂丘列である。而して之を實地に就いて檢しても、砂丘砂に腐植土を混じたものより成り、部分的には純粹

の砂丘砂が認められるのである。此の舊砂丘は勿論松を以て植林せられ、また茱萸、笹、その他の普通植物をも生じて完全に固定せられ、その向風側も多くは開墾せられて畑となり、主として麥が作られ、また蠶豆、桑なども作られるところとなつてゐる。江田より山崎に通ずる道路は大體その丘頂を縫ひ、江田・山崎兩聚落もまたこの舊砂丘上に立地する。丘頂附近の麥畑に開かれた部分も多い。向風側斜面の傾斜は八度である。第四圖は山崎江田間一〇・五米三角點の南方道路より砂丘間凹地の水田面を隔てて東方の松林ある海岸砂丘を望んだところを示す。

第四圖



山崎・江田線砂丘の背後には再び凹地が存在し、その間を北より南に一水路が貫いてゐる。而して該凹地を隔てた西方村角（ムラスミ）の立地する丘陵がまた舊砂丘であることはその地形からも推測し得るが、之を實地に就いて檢するも、この丘陵は事實舊砂丘である。上述のものと同樣松林に被はれてゐるが、麥畑に開墾せられた部分も多い。

山崎聚落の附近では矢張り胡瓜、南瓜などの早作りが盛で溫床が數多く認められる。

山崎の北方産母（サギ）の南方に於いては、砂丘上に百年生以上の松が認められ、その一本の年輪を檢するに一五〇を算した。一五〇年以前の當時既に松の植栽が行はれたのであらう。但し目下の處植林の歴史は詳かでない。

産母の砂丘上には松の外百年以上の樟などの普通植物も多い。此の砂丘が早くから既に安定してゐたことが知られる。

産母（今、宮崎市山崎町のうち）には縣社江田神社が鎮座する。式内社で、且此の地は祓傳説地阿波岐原であるとせられてゐる。[1] 砂丘上に式内社がありそれが神代の阿波岐原であると言ふことを不思議に思ふ人もあるかも知れぬし、またそれを疑ふ人があるかも知れないが、筆者は此處に式内社があり、また此處が祓の傳説地となつてゐることは地學的には何等疑ふ必要がなく、又決して不合理ではないと思ふ。何故かなら此の砂丘は古くから固定してゐたであらうから。併し此の砂丘が疑ひもない砂丘であることは、神社の北方に見る開墾による砂の切り取り面に於いて實證せられるのである。

産母の北方に於いては、前述の砂丘間凹地の連續も、南方に於けるよりは土地が高く、水田には開かれず麥畑となつてゐる。砂丘の傾斜も緩で、向風側に於いて三度、風下側に於いて四度を示すに過ぎない。山崎・産母線の砂丘は海岸から大きく數ふれば第二列砂丘をなすのであるが、この第二列砂丘は、更に小さく數ふれば、三列ばかりに並走してゐると言へる。第二列砂丘中の第二列と全第三列との間には若干の田圃もあるが、その他には田はなく、すべて畑となつてをり、諸砂丘列

が緩かな起伏を以て相連絡してゐるのである。

明治三十五年測圖五萬分一地形圖によれば、江田神社の東北に當り一つの池が存在するが、[15]現今は消滅してゐる。串間、林兩氏によればこれは明治四十年前後に埋沒したものであると言ふ。併しこの嘗て存在した池が、砂丘間凹地の水（地下水のことをも考へねばならぬであらう）を湛へたものであつたことは疑ふことが出來ぬであらう。

明治三十五年測圖五萬分一地形圖には記載せられてゐないが、御手洗（ミタライ）の南方道路に面して今、金（カネ）吹山（フキヤマ）なる部落が生じてゐる。この部落は、昭和十年四月九日發行の宮崎新聞によれば愛知縣人を主とする約五〇戸の移住部落とのことであるが、その、砂丘開墾を目的としたものであることは明かである。開墾された畑には、主として麥が作られ、桑も若干作られ、なほ煙草も作られるらしく、煙草の乾燥所が見られる。

明治三十五年測圖五萬分一地形圖によれば、御手洗の南方に一つ、全南西に一つ、全北西に二つの池が存在するが、今は全部消滅してゐる。串間、林兩氏によれば何れも明治四十年頃開かれて水田となつたものであると言ふ。里人の談によれば今より二〇年ばかり以前に開墾したものであると言ふ。更に里人の談によれば、小保下（コボシタ）の池は長池[16]と稱し今も一部分殘存するが、御手洗の四つの池は、その北方廣瀬村の牟田池（串間俊一氏の談によれば湧水のある如き濕地を此の地方にても牟田と云ふ）と同時に二〇年ばかり以前に開墾した、四つの池のうち御手洗南西のものは小池と稱したがそれ等の池の水は廣瀬の牟田池に流れたものである、畑の土を持來つて埋めたのであると言ふ。

小さな景觀の變遷に過ぎないとは言へ、嘗ては砂丘間凹地の水を湛へた池が今や紫雲英などの花咲く田圃と化してゐるのを見ると多少の感慨無きを得ない。（未完）

江戸時代の世界地理學史上に於ける職方外紀に就て

鮎澤信太郎

職方外記の校合彌以て御濟し被下候や、五卷目の中程に甚不埒の所相見へ候、此所はいかゞに御座候や、足下御本具足候はゞ少の間恩借仕度候、但し小子が本もとぢ樣の紛亂にて丁に不足もなく候はゞ、足下の御本被二借下一候に不レ及候丁不足候はゞ御本御借可レ被レ下候最も此人に奉レ願候。（林子平が藤塚知明に送つた書翰の一節……鈴木省三氏著林子平傳記三一頁……）

目次

一、はしがき　二、職方外紀
三、直接の影響　1.西川如見の華夷通商考　2.森嶋中良の紅毛雜話と萬國新話　3.山村昌永の增譯采覽異言
四、間接の影響　1.漢籍よりの間接影響　2.邦譯書を通じての間接影響
五、職方外紀輸入禁止の期間　六、結語
江戸時代の世界地理學史上に於ける職方外紀に就て　二七　三七